
発展学習03-2 高級な喜びはあるか？

「第3章 3.1. 幸福（生きがい）の本質はここにあり」のところで、スキナーの以下のような言葉を引用しました。

Happiness does not lie in the possession of positive reinforcers; it lies in behaving because positive reinforcers have then followed.

【佐藤方哉先生による日本語訳】

幸福とは、正の強化子【=好子】を手に行っていることではなく、正の強化子【=好子】が結果としてもたらされたがゆえに行動することなのです。

【意識その1】

好子 (positive reinforcers) 自体を手に行っているだけでは決して幸福にはなれない。好子出現によって強化されているような行動の中にこそ、真の幸福（生きがい）がある。

【意識その2】

モノをいくら手に入れても幸福にはなれませんよ。幸福というのは、行動することで初めて得られるものです。といっても、徒労や強制労働は含まれません。結果として好子が出現するように強化されている行動の中にこそ真の幸福があります。いくら、好子、好子と追い求めても、真の幸福をもたらす好子など決して存在しません。いっぽう、がむしゃらに行動するだけでも幸福にはなれません。「行動」と「好子出現」がセットになって初めて、真の幸福（生きがい）を実現させることができます。

この発展学習項目では、戦争や貧困、健康不安などの無い平穏な状態のもとで、「オペラント行動→好子出現」さえ保障されれば、誰でも幸福になれるのか？ その際、刹那的な快楽をもたらす好子と、努力を重ねて得られる成果のような好子は区別しなくてよいのか、といった問題について考えてみることにします*1。

あくまで孫引きの知識ですが、功利主義者として知られるジェレミー・ベンサム (1748-1832) はかつて

- ・社会から苦痛を減らし幸せを増やす。
- ・幸福が苦痛を上回る。
- ・幸福の最大化→効用の最大化。

*1 「労働→賃金」という好子出現の随伴性が必ずしも生きがい、働きがいを保障するものでない点については、第8章「阻止の随伴性」とその発展学習をご覧ください。

- ・喜びの量が同じであればプッシュピン【ピンをはじいて相手のピンの上を越えさせる子供の遊び。児童、ささいな事。】は 詩と同じように良い（喜びに優劣はない）。

と説いたそうです。これに対して、ジョン・スチュアート・ミル（1806～1873）は、

- ・高級な「喜び」低級な「喜び」の区別は可能
- ・2つの喜びのうち 両方を経験したものが全員または ほぼ全員 道徳的義務感と関係なく迷わず選ぶものがあればそれがより好ましい喜びである。
- ・満足した豚であるより 不満足な人間であるほうがよい。満足した愚者であるより 不満足なソクラテスであるほうがよい。その愚者が もし異を唱えたとしてもそれは愚者が自分の側のことしか知らないからにすぎない。

と説いたそうです。

喜びの質の差に関連してもう1つ、マズローの欲求段階説に言及しておきます。ご存じの方も多いかと思いますが、以下に、ウィキペディアから概略を要約引用しておきます。

- ・人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである
- ・人間の基本的欲求を低次から述べると、以下の通りとなる。
 - ・生理的欲求 (*Physiological needs*)
 - ・安全の欲求 (*Safety needs*)
 - ・所属と愛の欲求 (*Social needs / Love and belonging*)
 - ・承認（尊重）の欲求 (*Esteem*)
 - ・自己実現の欲求 (*Self-actualization*) : 以上4つの欲求がすべて満たされたとしても、人は自分に適していることをしていない限り、すぐに新しい不満が生じて落ち着かなくなってくる。自分の持つ能力や可能性を最大限発揮し、具現化して自分になりえるものにならなければならないという欲求。すべての行動の動機が、この欲求に帰結されるようになる。
- ・マズローは晩年、5段階の欲求階層の上にさらにもう一つ、「自己超越」(*self-transcendence*)の段階があると発表した。

この段階説においてもおそらく、低次の欲求を満たした時の喜びと、より高次の欲求を満たした時の喜びは区別されているものと思われます。

冒頭に述べたスキナーの幸福の定義は、どちらかと言えば、「喜びの量が同じであればプッシュピンは 詩と同じように良い（喜びに優劣はない）」というベンサムの考えに近いように思われます。要するに、行動を強化する好子に、「高級な好子」と「低級な好子」の区別はないということです。但し、「行動と好子出現のセット」が幸福（生きがい）の必要条件であるという点を忘れてはなりません。つまり、行動随伴性のタイプによって、長期的見通しを持った持続的で質的向上がもたらされるか、それとも目先の結果だけを重視した1回完結型の喜びに終わってしまうのかは大きく異なってきます。ある程度健康で

累積的な成果を獲得できる人であれば、地道な努力の積み重ねによって初めて得られる成果（=これが「高級な喜び」に相当）を目ざしていったほうが、刹那的ですぐに飽和化（要するに飽きてしまうということ）しまう喜びよりも、結果として持続的で大きな喜びを獲得できるものと思われます。

但し、健康状態が悪化して、努力の積み重ねが困難になった方の場合には、「いま、ここ」を大切にするような喜びが必要な場合もあります。また、日々のあたりまえの生活行動、つまり、「きのうと変わらない世界で、きのうと同じことができること」に喜びが見出せる場合もあります。

なお、「利己的な喜び」と「利他的な喜び」については、別の発展学習項目「人生観（ライフスタイル）と随伴性」のところで考察します。